第 27 回　大津市坂本の生源寺　　筆者：林　久治　（記載：2017 年 3 月 10 日）

（1）前書き

私（筆者の林）は Random Walks （乱歩）という題名で偏屈老人（林久治）の気侭な紀行文のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

前回までは、「近畿・2016 年晩秋」と題する 6 編の紀行文を書いた。興味のある方は、次に記事をクリックして下さい。20 回の記事/f：大津市の鉄道史、21 回の記事/f：弘文天皇陵、新羅善神堂および新羅三郎の墓、22 回の記事/fでは、法明院、フェノロサの墓、桜井敬徳師の銅像、23 回の記事/f：琵琶湖疎水、24 回の記事/f：三井寺と仏教に対する私見、http://25 回の記事/f：三井寺の力餅。なお、26 回の記事/f では、東京の義士祭を紹介した。

私は、本年の 2 月 21 日から 3 月 8 日まで大阪に滞在した。3 月 6 日には、娘に第 3 子が誕生した。初めての女児である。その間、私は運動を兼ねて、近畿地方の神社仏閣に参詣した。2 月 28 日には、大津市坂本の門前町を散策した。これから数回、坂本乱歩の記事を書く予定である。

図 1．大津市坂本の市街略図

（2）大津市坂本の門前町

大津市坂本には多くの神社仏閣があり、大きな門前町を形成している。日本には多数の門前町があるが、その殆どが単一の神社仏閣を中心としている。例えば、讃岐金毘羅神社の琴平町、善光寺の長野市、新勝寺の成田市、伊勢神宮の伊勢市などが有名である。

ところが、大津市坂本には、図１に示すように、多くの神社仏閣が存在している。①日吉大社（日枝大社とも書く）、②日吉東照宮、③志賀院門跡（比叡山延暦寺の本坊）、④西教寺、⑤図１には記載されていないが、坂本にはその他に大小の神社仏閣が多数ある。それらは相互に作用しあって成立したのであろうが、私は「なぜこのように多数の神社仏閣が集合しているのか」に興味を持ち、一度は坂本の門前町を見物したいと思っていた。そこで、私は２月 28 日に当地を訪れた。

図１に示すように、大津市坂本の中心には京阪石坂線の「坂本駅」がある。しかし、20 回の記事/f で記載したように、大阪方面から京阪石坂線を経由して坂本駅に行くのは乗換が不便である。それより、JR 湖西線を利用して「比叡山坂本駅」に行く方が、早く行けて、しかも座れやすい。なお、東海道線の「新快速」から湖西線への乗り換えは、京都駅ではホームの移動があり大変不便である。この乗換は、次の「山科駅」では同じホームで行えるので大変便利であった。

図２．比叡山坂本駅と京阪・坂本駅の周辺（坂本観光案内所で貰った地図の一部）

図２に示すように、「比叡山坂本駅」から「ケーブル坂本駅」まで、江若交通バスが毎時 08 分と 38 分に連絡バスを運行している。このバスを利用すると、坂本中心部やケーブル駅に行くのに便利である。坂本ケーブルは毎時２回の運行で、このバスが連絡している。坂本ケーブルの終点は「延暦寺駅」で、根本中堂に近い。

私（林）は「坂本は比叡山延暦寺の門前町である」と思っていた。しかし、本記事を書くために調査すると、「史実は逆で、最澄は日枝神社の近くで生まれ、日枝神社のご神体である比叡山に延暦寺を建立した」ことが分かった。1）のサイト/1には、門前町坂本の優れた紹介がある。

（3）生源寺

図２が示すように、生源寺は京阪・坂本駅の駅前にある。生源寺の紹介は、2）のサイト/4が優れていが、私独自の目線で生源寺を紹介する。図３は生源寺の山門である。図４に、山門脇の説明板と本堂を示す。山門を入って右側に、伝教大師の産湯井戸、大師童形像、及び産湯井の石碑がある（次ページの図５を参照）。なお、この銅像は、「ヒロ男爵」の「日本の銅像ギャラリー」に収録されていない。

図３．生源寺の山門

図４．左：生源寺山門の案内板、右：生源寺の本堂

図５．左：伝教大師の産湯井戸と大師童形像、右：産湯井の石碑

図６．左：大師童形像の全体、右：大師童形像の上部

図６左の大師像は高さが 50cm 位で小さいのが印象的であった。この像は「水かけ大師」と呼ばれ、隣の水道から水をかけてお祈りするそうである。私の写真では不鮮明であったが、１）のサイト/1によれば、銅像正面の銘文は「伝教大師童形御尊像」と書かれているようである。台座左側には「一隅を照らす」と彫られており、台座背面には銅像の建立年月日、寄進者、および製作者が書かれている（次ページの図７左を参照）。図７右は、銅像の背後から見た生源寺境内と比叡の山並みである。

図７．左：台座背面の銘文、右：銅像の背後から見た生源寺境内と比叡の山並み

図８．左：写経塔と本堂、右：本堂の内部

図８左は写経塔と本堂、右は本堂の内部である。本堂には次の説明文が掲示されていた。「ここは、比叡山を開かれた伝教大師がお生まれになったところで、後に寺が建てられ、生源寺と名付けられた。ご本尊は十一面観音菩薩で慈覚大師作と伝えられている。現在の本堂は 1595（文禄４）年に詮舜によって再建され、さらに 1710（宝永７）年に改築されたものという。伝教大師は 767（神護景雲元）年８月 18 日に誕生されたが、父は三津首百枝公、母は藤原藤子妃で、本堂にはそのご尊像祀られている。」

なお、[１）のサイト/1]には、「（本堂の）お前立ち本尊は十一面観音。厨子の中の本尊は、第３代天台座主・慈覚大師(円仁、794-864)作という『十一面観世音菩薩』」との記載がある。詮舜（1540-1600）は延暦寺の僧である。また、生源寺の境内には、「伝教大師ご一代年表」や「ご誕生の絵図」が掲示されている。次ページの図９に、「ご誕生の絵図」の写真を示す。

図９．生源寺に掲示されている「ご誕生」の絵図

（４）大将軍神社と市殿神社

図２にあるように、生源寺に隣接して大将軍神社と市殿神社とが建立されている。次ページの図 11 に、両神社の写真を示す。[２）のサイト/4](#)によれば、「比叡山の守護神社は日吉大社で、生源寺の守護神社は大将軍神社である。大将軍神社の御祭神は大山祇神と岩長姫神の２柱で、最澄の産土神（うぶすながみ）として最澄生誕の地の鎮守の神様である」そうだ。市殿神社を説明する石碑を図 10 に示す。

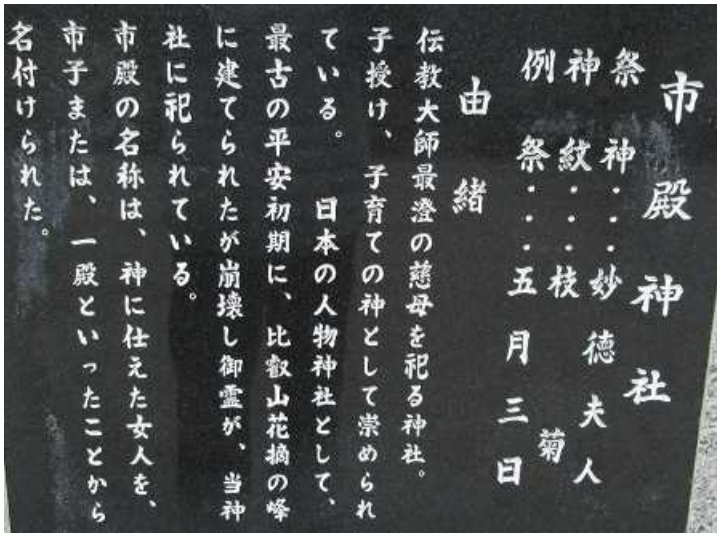

図 10．市殿神社を説明する石碑

図 11. 上：大将軍神社、下：市殿神社

（５）生源寺と樹下氏

３）のサイト/1に興味深い記事があったので、その要約を以下に記載する。

日吉大社は比叡山の東麓、延暦寺の門前町でもある坂本に鎮座する。「日吉」は、古くは「日枝」「稗叡」「比叡」等と表記し「ヒエ」と訓んだが、平安後期頃より「ヒヨシ」

とも称するようになった。西、東の本宮があり、東本宮には比叡山の山の神である大山咋神を祭り、大山咋神は日吉大社の元来の祭神、すなわち地主神（小比叡神）である。『古事記』に「大山羽咋神は亦た山末之大主神と名づく。此の神は近淡海国の日枝山に坐します。亦た葛野の松之尾に坐します。」とあるように、京都の松尾大社の祭神と同神とされる。　一方、西本宮は、社伝によれば天智天皇の創祀と伝え、天智天皇の大津京遷都に伴い大和の三輪山の神（大比叡神）を勧請したものとされる。

日吉大社の社司は加茂県主の同族と伝えられる祝部宿禰が、代々継承してきた。その祖は神皇霊産尊とし、天智朝のころの宇志麻呂のときに大比叡神を祀り、祝部宿禰を賜った。以後、その子孫が奉仕をした。十世紀に至って、左方と右方の二流に分かれ、それぞれ大比叡神、小比叡神の禰宜を務めた。のちに左方は生源寺を称し、右方は樹下氏を称した。しかし、延暦寺の支配下にあっては、天台座主が検校職を兼任し、社家はその配下に置かれていた。とはいえ、両家ともに連綿と代を重ね、いずれも明治維新に至るまで日吉大社の社家として続いた。

ところで、戦国時代、とある武士が傷ついて日吉神社の付近にやってきた。いかなる理由があったのかは分からないが、その武士は神職の樹下氏を頼ってきたものであった。樹下氏は娘をあてがって武士を介抱させたが、やがて二人は愛しあうようになり、男子が誕生した。生まれた男子は日吉丸を名付けられた。しかし、その武士は傷がもとで五体不自由となり、尾張の人であったとみえて、国へ帰っていったという。

以上のことに関して、明治四十五年発行の『歴史地理近江号』に興味深い記事が載っている。「日枝神社の祀官を生源寺、樹下の二氏とす。一大宗より分かれ、久しき渉りて、迭立の勢を為す。樹下氏は伝ふ、秀吉は樹下の血統に出ず」「樹下氏の女、入って命婦となり、日輪懐に入ると夢みたることあり。間もなく故ありて尾張に来り、秀吉の父に嫁して、秀吉を生めるなりといふ」と。これらのことが、どこまで、史実を伝えているかは不明である。しかし、英雄豊臣秀吉の素性に思いを馳せるとき、なかなかに興味深い話ではなかろうか。

図 12. 樹下氏の邸宅

日吉大社から西教寺に行く「山の辺の道」に「樹下」の表札を掲げた邸宅があった。このお宅は、多分、上記の「樹下氏」の一族であろう。

引用したサイト

１）のサイト：http://blog.livedoor.jp/yayug7/archives/11658193.html

２）のサイト：

http://blog.goo.ne.jp/hearts-ease_2005/e/597a83cf524de9bc9f95ea7a478f9284

３）のサイト/1：生源寺/樹下氏